

領域「表現」の授業実践における創造的な音楽表現活動の意義

田中知子

(龍谷大学短期大学部/大阪総合保育大学大学院)

1. 研究の目的

保育者養成校における領域「表現」の授業においては、学生が自身の創造性を育むとともに、子どもの創造性を豊かにするための援助や指導法を身に着ける体験が重要とされている。そのことを踏まえ、筆者は1年次生の授業において創造することを、“聴く”“感じる”“探索・探究する”を基盤に「音や音楽を創り出す活動」と意味づけ、実践的な取り組みを行っている。本研究では、授業での体験を通して、①学生の「子どもが『音や音楽を創り出す』こと」への捉え方がどのように変容したかを探り②その上で、領域「表現」の授業において、本実践が意義あるものであったかどうかについて検討することを目的とする。

2. 研究方法

授業1回目と8回目（最終回）の授業終了後に、同じ質問項目についてのアンケートを実施した。質問内容は、「音や音楽にかかわる表現活動を通して、子どもが『音や音楽を創り出す力』を育むためには、どのようなことが大切だと思いますか。」とし、自由記述での回答を求めた。それぞれの回答の分析には、KH Coder3. Beta. 03i（樋口、2020）を使用し、学生の「子どもが『音や音楽を創り出す』こと」への捉え方の変容について調査した。

3. 授業内容

科目：幼児と表現B

対象：令和5年度龍谷大学短期大学部こども教育学科1年次生80名（2クラス開講）

期間：令和5年5月から7月にかけての8回

内容：替え歌をつくる、即興的なリズムの応答、絵本からオノマトペをつくる、ボディーパーカッションをつくる、キャンパス音マップをつくる等。（発表当日別紙配布）

4. 結果と考察

授業1回目と8回目の結果について、(1)抽出語(2)階層クラスター分析の2点から示し、学生の捉え方の変容を考察する。なお、最小出現語の設定数は、「3」に設定した。

(1)抽出語について

1)1回目の結果

分析対象に含まれる全ての語（総抽出語数）は、1719（使用語数694）語、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数は、308（使用225）語が抽出された。

10回以上出現する上位の単語は、「触れる」「楽しい」「歌」「歌う」「色々」「楽しむ」「楽器」「モノ」「一緒」である。このことから学生達は、「子どもが色々なモノや楽器に触れて音や音楽の楽しさを知ることが大切」「保育者が子どもと一緒に歌うことや音楽を楽しむことも大切」と捉えていることがわかった。

1回目のみ出現した語は11語であり、その中で一番出現回数が多いのは、「教える」であった。KWIC コンコーダンスという検索機能を活用して文脈を確認したところ、子ども達に何かを教え込むということではないが、音楽の良さや楽器に触れる楽しさを「保育者が教える」こと

が大切であると捉えている。

2) 8 回目の結果

分析対象に含まれる全ての語（総抽出語数）は、2339（使用語数 991）語、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数は、383（使用 283）語が抽出された。

10 回以上出現する上位の単語は、「表現」「触れる」「自分」「楽しむ」「リズム」「色々」「楽器」「日頃」「保育者」「創り出す」である。

このことから学生達は、「日頃から子どもが色々な音や楽器、音楽に触れて楽しむことや、自分の思いを表現することが大切」と捉えていることがわかる。とりわけ、リズムにかかわり創り出すことや表現することに注目している。また、「子どもが自分で感じたままに創り出すことができるような保育者の援助についても大切」と捉えていることがわかった。

8 回目のみ出現した語は 32 語であり、その中で一番出現回数が多いのは「活動」であった。KWIC コンコーダンスで文脈を確認したところ、「楽器を使った活動」「リズムや拍を取る活動や音を探索する活動」「自由な活動」「園外の活動」など、様々な活動が必要と捉えている。また、子どもが表現する中で「感じる」ことや、「感性」を豊かに育むことが大切と捉えている。さらに、リズムや音楽を創り出す上で「体」や「オノマトペ」がツールになると捉えていることがわかる。加えて少数ではあるが、音を「探索する」ことの必要性を感じている。一方、「提案」「見守る」といった保育者の具体的な援助方法や、子どもに対する「多様」な考え方が必要と捉えていることもわかった。

3) 1 回目と 8 回目の比較

8 回目の方が全体の語や使用語数、および異なり語数が増加していることから、学生の気付きや考えがより具体的になったということが言えるだろう。また、共通に含まれる語であっても出現数に変化が見られ、特に「自分」「表現」「リズム」「日頃」の出現数が増加していることが確認できた。日頃から耳を傾けて音に聴き入ることや、自分の体を使ってリズムを創り出すことや表現することが大切と考えていることがわかる。さらに、「教える」という語は 8 回目には出現せず、音や音楽の面白さは子ども自身が感じ、自分で体験して気付くことが大切と認識していることが推察できる。加えて、8 回目には「保育者」の出現数が増加しているが、子どもと一緒に楽しむだけではなく、どうすればより子どもの創り出す体験が豊かになっていくのかという視点で、援助方法等を捉えていることがわかった。

(2) 階層クラスター分析から

1 回目は、「日頃から音や音楽の楽しさに触れること」が一番大切と捉えているが、8 回目はそれに加え、「音について考えたり、自分の表現を仲間と共有したりしながら自分自身で創り出すこと」が大切と捉えていることがわかった。詳細については紙面の都合上、当日発表する。

5. まとめ

以上のようなことから、1 回目であっても全くの白紙という状態ではなく、学生のこれまでの経験や教育を受けてきたことが反映されており、そこを基盤に 8 回の授業を通して、さらに考えが広がったり深まったりしたということが言えるのではないだろうか。また、8 回目の記述における子どもの体験には、聴くことや体を使ってオノマトペやリズムを表現する等、授業で取り組んだ活動に言及しているケースが多く見られた。さらに、8 回目には「感じる」「感性」「表現」といった領域「表現」のキーワードが新たに出現したり出現回数が増加したりしていることから、本実践は領域「表現」の授業において意義あるものであったと言えるだろう。